

当財団では、調査研究の成果を、出版物を通して広く公開しています。各書は次の方法でお求めいただけます。

- 当財団ホームページ／賛助会員様は一部を除き会員価格がごいます。
http://www.jtb.or.jp
- 書店／大型書店、政府刊行物サービスセンター（官報販売所）取扱所などで購入いただけます。または、お近くの書店で注文ください。
- オンライン書店／オンライン書店からは、紙書籍版とともに、電子書籍のペーパーバック版（プリントオンデマンド印刷）、電子書籍版も発行しています。

■ 美しい日本 旅の風光（JTBパブリッシング）（2014年5月発行）

調査研究専門機関として50周年を迎えたことと、期に当財団が長年取り組んできた「日本における観光資源の評価に関する研究」の成果を基に監修した写真集。完全英語訳付きで海外の方にも広く日本の観光資源の魅力をお伝えできる1冊。
* 電子書籍版も発行中（電子書籍版は掲載写真の部を変更あるいは非掲載となっています）。



■ 平成26年度観光地経営講座 講義録 最新刊（2015年3月発行）

* オンライン書店（amazon.co.jp）三省堂オンデマンドより「ペーパーバック版」印刷も発行中。



■ 2014年度温泉まちづくり研究会ディスカッション記録（2015年7月発行）

* オンライン書店（amazon.co.jp）より「ペーパーバック版」印刷も発行中。
* オンライン書店（amazon.co.jp）より「ペーパーバック版」印刷も発行中。
当年度開催3回の記録です。第1回は「海外の魅力のなりとどろきに学ぶ」。第2回は「現代アートを起爆剤に温泉街を活性化!?」道後温泉のまちづくりに学ぶ。第3回は「改めてインバウンドについて考える」。温泉地の将来を考える上で、多くのヒントが見えてくる1冊。



* オンライン書店（amazon.co.jp）より「ペーパーバック版」印刷も発行中。
日本人の旅行実態に関する調査、訪日外国人の発地調査、都道府県別の観光政策アンケート調査などの当財団独自調査の分析レポートを中心に、「旅行市場」「観光産業」「観光地」「観光政策」について直近1年の動向・出来事を総覧した1冊。当財団の研究員が分析執筆、編集。当財団ホームページにてPDFを公開。



※ 担当：公益財団法人日本交通公社 観光研究情報室
電話 03・5566・6076 http://www.jtb.or.jp

次号予告

● 近隣諸外国において観光研究者の国際的な活動や交流が急速に活発化している様子が伝わってきます。我が国にはそれら各国の「観光研究」の動向や特徴に関する基礎的な情報が少ないようです。次号では、まずは近隣のアジア諸国を対象として、大学、シンクタンクなどの観光関連学術研究機関がどのような観光研究に取り組み、社会的にどう期待されているのかなどに関する基礎的な情報収集調査を実施し、分析を試みます。

当財団からのお知らせ

「2015年度シンポジウム・セミナー開催予定」

● 第25回 旅行動向シンポジウム
当財団主催の今年度のシンポジウム・セミナーについてご案内します。
2015年10月23日（金）

会場：大手町サンスカイルーム（東京・大手町） 朝日生命大手町ビル27階
本年10月発行の最新版「旅行年報2015」の内容をもとに、日本人の旅行市場、観光産業、観光地の動き、観光政策、訪日外国人（インバウンド）の旅行市場について、当財団独自調査結果を複数交え、研究員が概説します。
詳細については、当財団のホームページ（http://www.jtb.or.jp）をご覧ください。

「研究員コラムの紹介」（2015年6月～8月）

各研究員が独自の経験と視点を基にして、ホットな雑感を綴ります。当財団ホームページ「研究員コラム」に掲載した3カ月分をご紹介します。

- 2055 富士登山のススメ（初級）——（中島泰）
- 2056 観光振興の担い手——（中野文彦）
- 2057 「自撮り棒」が観光客同士のコミュニケーションを奪う？——（西川亮）
- 2058 子育て世代の心をつかむ旅行とは——（福永香織）
- 2059 自動車での移動と地図とカーナビ——（堀木美告）
- 2060 しまなみ海道における自転車旅行の推進に関する考察——（牧野博明）
- 2061 ロングトレイルコラム——（吉谷地裕）
- 2062 「ビバルマン・トラック」を歩いて——（吉澤清良）
- 2063 その普遍的価値を伝えたい！——（吉澤清良）
- 2064 訪日外国人の消費動向から見た——（相澤美穂子）
- 2065 「納涼」季節を楽しむ暮らし文化——（大隅一志）
- 2066 旅行に行きたくなるビジュアルとは——（柿島あかね）
- 住民と「泊住民」——（門脇菜海）

編集後記

◆ 以前勤務していた旅行会社でドイツ・デュッセルドルフに駐在開始当初、ドイツ人の仕事と休暇に対する考え方や取り方の自分にとっての常識とのギャップに驚きました。日本だと仕事のスケジュールや段取りをまず決め、その後仕事の様子を見ながら休みを入れていきます。これが普通だとの考えを抱いてドイツ人との業務計画を立てるべくスーパーバイザーと打ち合わせに入りました。ドイツ人管理職が真っ先にすることはスタッフの30日有給休暇の「年間休暇計画」調整から始まるのです。これが決まった後でようやく業務計画を立てていくというものでした。

◆ 休暇パターンはおおむね2つで、30日連続か、2週間を2回に分けるかでした。休暇計画を決めるとスタッフは仕事も計画的に進めていきます。段取りよくきっちり仕事をこなしていきます。自分を含めて日本人スタッフの仕事と休暇に対する考え方がだいぶ違っていたことが印象的でした。ドイツ人スタッフの休むために仕事をするとという考え方に違和感がありました。人生の中で仕事と休息（休暇）の意味を考えさせられる経験でした。

◆ 日本でこのような休暇取得が一般的にならない背景や要因に何があるかが、ご寄稿から見えてきました。豊かに生きるための手段として旅、旅行があるなら、自律的にも他律的にも実現へ向けて、今号の特集がきっかけになればいいと考えています。（片桐）
観光文化編集室メールアドレス：
kankouunka@jtb.or.jp